特集 語り継ぐとき
繁藤大災害から40年

60名の尊い命が奪われた昭和47年7月5日に起きた豪雨・繁藤 山崩れ災害から40年が経った。全国でも最大規模の大災害は私たちに多くの教訓を残した———

①2次災害後の現場。繁藤駅の歩道橋の先には列車が横転している。穴内川に水没した2両目の客車には車掌や学生が乗っていた。停車中のもう1台の列車は土砂に押されて、川をとびこえて対岸の山肌に突き当たり、スクラップとなった。

歴史的豪雨

災害前日の7月4日、この日は雨が激しく降り、旧土佐山田町では災害対策本部を設置していた。

災害の起きた繁藤では、7月5日午前5時から午前7時の間に時間雨量95㍉以上の驚異的な豪雨となり、4日午前9時から5日午前9時までの降水量は742㍉に達し、気象庁開設以来10番目の記録となった。

一次災害発生

5日午前5時ごろ、追廻山（おいまわしやま）で1回目の山崩れが起きた。民家に土砂が流入し、私設消防団が土砂を取り除く作業に当たっていた。

午前7時前、2回目の山崩れが起こり、その家の裏手で警戒中の繁藤消防団員が生き埋めとなり、新たに民家1棟が半壊となった。土砂はこの家屋を通って国道まで流出していた。

困難な救出作業

雨が激しく降り、3度目の山崩れが起こり、救出作業は中断された。救出作業が再開され、人力でなかなか進まない作業に、午前10時ごろ、ショベルカーによる家屋・土砂の取り除き作業が始まった。この間、作業員は、全員国道側で作業を見守り、人力を要する場合に応じられる体勢で集結していた。

このとき、現場の山腹からは大量のわき水が流れ出していた。

二次災害発生

10時50分、激しい雨のために崩土が流れ、ショベルカーによる作業が中断された。国道上で待機中の作業員は、東西に数十㍍退避した。その直後、およそ高さ10㍍、幅25㍍の山崩れが起き、2棟が被害を受けた。

退避していた作業員はさらに、現場から遠くに離れた。

この4度目の山崩れから1分後の10時55分、ついに大崩壊が起きた。

山腹に大きな亀裂が発生し、雷が落ちたかのような音とともに、約10万㎥の土砂が一瞬のうちに、駅前付近の集落を押し流して、60名が行方不明となり、一次災害とあわせ、60名の尊い命が奪われた。

②一次災害後の救出作業現場。山腹からは大量のわき水が流れていた。この後大崩壊が起こる。③難航する二次災害後の捜索作業。④災害時は商店街も冠水していた（土佐山田町西本町）。⑤橋脚が陥没して北側に傾いた香我美橋（土佐山田町神母ノ木）。このほか山田ゼキの決壊や、新改川のはんらん、上改田橋が陥没するなど、各地で大きな被害が出た。

難航する捜索活動

災害発生当日、災害現場には陸上自衛隊をはじめ、次々と救援があり、重機も投入された。行方不明者の捜索作業は徹夜で続けられたが、あまりにも大きな災害と断続的な大雨のため、懸命な活動にもかかわらず難航した。

町内外から約1500人が連日動員され、捜索は遺体を傷つけないようにスコップでの作業が行われた。

川底からも遺体が発見され、穴内川下流では、町職員や消防団員などが出動し、遺体が流れぬように、濁流の中で、金網をはり、万全の構えで捜索にあたった。

7月22日、ダイバー67人を中心に900人が参加した穴内川から吉野川までの延べ22㌔㍍の一斉河川捜索を終え、事故発生以来活躍した自衛隊が引き上げた。このときの遺体収容数は57体で、最後の行方不明者の遺体が発見されたのは翌年2月であった。

支援の輪

全国的に報道されたこの災害には、義援金や救援物資が続々と寄せられ、絶望と不安の極にある遺族に希望を与え、作業にあたる人たちに大きな励ましとなった。義援金総額は6875万9296円。救援物資は遠く北海道・関東方面からも、昼夜をとわず大量に届けられた。物資には生鮮食品が多く、現場で給食となって支給され、底冷えする河床の夜間作業や炎天下で捜索する人々のエネルギー源となった。

INTERVIEW

元消防職員
光明 和夫

災害当日は、勤務明けであったが、1次災害が起き、配備された。巡回中に無線で、「汽車が埋まった」と連絡が入り、繁藤に向かった。災害現場は、鉄道の枕木の間から遺体が見え、壮絶な光景で手もつけられない状態だった。雨は降り続いていたが救助作業は始まっておらず、現場の様子をひとことで表すと『静か』であった。この災害により、多くの同僚・先輩を失い、自然災害の恐ろしさを実感しました。必ずくるであろう南海地震等の自然災害に対し、まず自分の身体を守り、住民の手助けができるようにしたいと考えています。

市政策企画財政課長
濱田 賢二

繁藤大災害発生時に動員された旧土佐山田町の職員は私を含め、わずか3人になった。市職員には、平常時の業務はもとより、有事の際には、先頭に立って行動するという市民の期待があるということを、日ごろから肝にめいじておいてほしい。